

長期入院患者の

主体性・活動性向上に繋がった一例

～等質性の高い小集団OTプログラムを通して～

医療法人社団 五稜会病院
作業療法士 泊り 由希子

平成25年11月15日
第2回日精協日本精神科医学会学術大会(大宮)

はじめに

- 当院の療養病棟の長期入院患者は周囲に興味・関心が向かず活動性が低下し他者との交流が乏しい傾向にある。
- 自己に対しても関心が向きにくく、主体的に自身で取り組むことや自己決定の機会が少ない。
- さらに加齢に伴い身体の柔軟性など身体機能面の低下が認められる。

↓

等質性の高い小集団で作業療法(以下OT)プログラムを実践


作業療法士(以下OTR)としての狙い

安心感を得られ、**集団の個々が支えあう**小集団作り
自分には力があると実感してもらいたい

集団の特徴

- 等質性: 集団を構成する大半は女性であり、60歳以上、入院は長期間に渡り10年以上が多数(疾患: Sc9割・他)を占めている。相互共感が得られやすいよう比較的互いの差が少ない等質集団
- 開放度: セミクローズド
- 時間頻度: 5～6回/週、20分程度/回

集団力動を用いてウォーミングアップ後(ゲーム形式要素を用いた構音訓練などに嚙下体操を用いた発声や体操プログラム)



症例紹介

- 氏名・性別・年齢: A氏・女性・70代後半
- 診断名: 躁うつ病
- 経過: X-37年頃より躁うつ状態が出現し様々な病院で短期の入退院を繰り返す。X-10年、当院に医療保護入院となる。次第にうつ状態が遷延し入院が長期化した。

X年、OTの参加状況は週一回程度であり、対人交流も少なく受身的であり周囲にさほど興味関心を寄せることはなく自室で終日臥床し自閉的に過ごしている。また加齢に伴いむせや身体の柔軟性など身体機能面における低下も認められる。

経過(Ⅰ期: 拒否が強く参加への促しに抵抗を示した時期 開始～3ヶ月)

A氏

- 「やりたくない」と拒否。プログラム参加は不定期
- 表情変化に乏しく自己評価低い発言
- 緊張感強く他者の言動に応じることはほほない
- 自己の身体に関し、興味向かず具体的な表出は乏しい

他メンバー

- A氏の発言に対し周囲の反応は乏しい
- 凝集性低く、相互交流も乏しい
- 集団の雰囲気も静かで緊張感がある

↓

- 根気良く必要性を説明&声かけ
- 自閉性の保障
- 正のフィードバックを強化する関わり

OTRが主となりA氏と集団メンバーを支える

経過(Ⅱ期: 所属意識が芽生えた時期 開始4～11ヶ月)

A氏

- 「ちょっとした失敗」においても落ち込みなく苦笑→安心して失敗
- 自己の身体に関し「早食い。むせてしまうのが大変」と具体的に

他メンバー

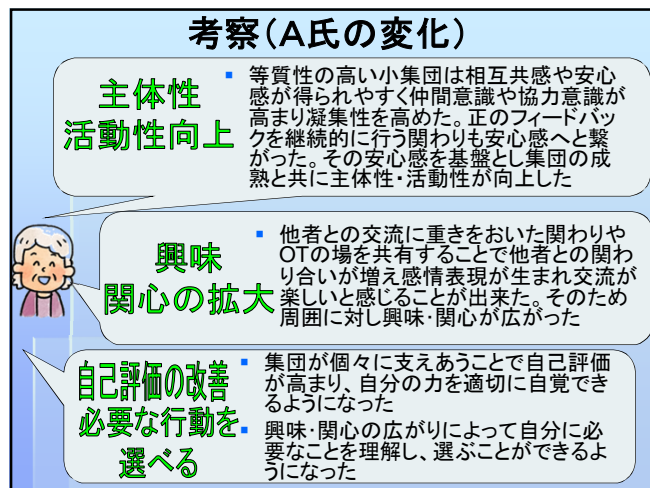
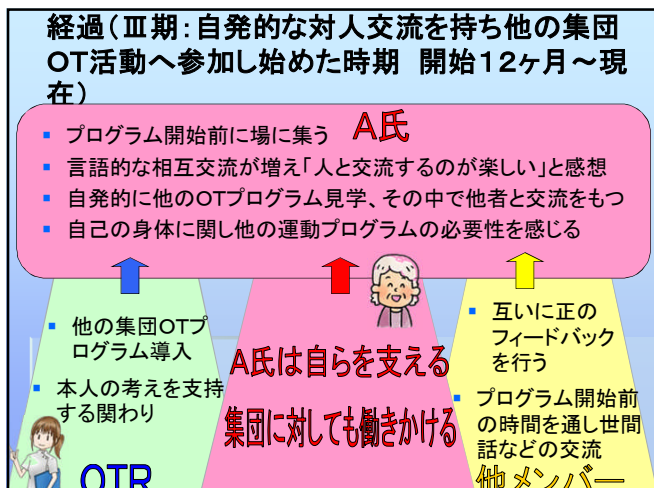
- プログラムに楽しみや工夫が見られる
- 相互交流が生まれる

↓

- 所属集団を意識出来るよう声かけの工夫
- 「他者との交流」に重きをおいたフィードバック

OTR

■ 適度に注目される場面を設定し満足感を得られるよう関わる



まとめ

- 今回、等質性の高い小集団OTプログラムを通し主体性・活動性の向上が認められた。
- 正のフィードバックに重きをおいた関わりを継続的に行ったことが、集団の凝集性へと繋がった。
- 集団の成熟と共に一人一人が支えあい、A氏自身も集団内で認められることへと繋がり自己評価が高まり、自分の力を適切に自覚できるようになった。
- 主体性・活動性の向上と共に自己に対して関心を示すようになり患者自身、自ら行動を選び適度に行えるようになった。